從台灣日語學習者與訪台日本研修團之交流狀況思考對日交流能力之培養方法

黃英哲

臺中科技大學應用日語系副教授

摘要

為使對日交流之指導方式能更具體，本篇論文從話題、期待、不安、魅力、衝擊、場景、困難、表達 8 個面向來分析台灣的日語學習者與訪台的日本人研修團之交流情形。其中，日本人研修團乃指訪台交流之日本學生棒球隊或日本大學生研修團。分析的方法是針對 103 名擁有高階日語程度的台灣日語學習者施予開放式問卷填答及追蹤訪談。分析的結果整理如下三點:(1)上述 8 個面向的具體內容可供日後對日交流指導上與課堂進行安排上的重要參考。(2)在架構層面(語彙文法能力、發話建構能力)的指導上，為使學習者能介紹台灣特有的人神與事物，建議需有計畫性地且具體地導入相關語彙與表達。(3) 有關互動層面(問題解決能力、社會語言能力、流暢表達能力) 的指導，在問題解決能力的培養上，應訓練學習者能在尊重對方意見的狀況下，藉由邏輯式的反向思考傳達自身的想法。在社會語言能力的培養上，應讓學習者對自身文化歷史與現狀有挖掘力與敏感度。在流暢溝通力的培養上，本篇論文主張可導入日本趣味搞笑之內容，來訓練學習者能有幽默發話的能力。另亦建議須讓學習者做到交流前之準備、模擬演練；交流中的記錄；交流後的反省。

關鍵詞：日本人研修團、對日交流能力、台灣日語學習者、架構層面、互動層面

受理日期： 2017.08.31

通過日期： 2017.10.20

A study of interaction proficiency between Japanese learners in Taiwan and trainees from Japan

Huang, Ying-Che

Associate Professor,

Taichung University of Science and Technology, Taiwan

Abstract

The purpose in this paper is to make the instructions about intercultural communication between Taiwan and Japan more specifically by analyzing the interaction between Japanese learners in Taiwan and visiting trainees group from Japan in 8 facets (subject, expectation, worry, attraction, shock, difficulty, expression). The Japanese trainees group here referred to Japanese student baseball teams or Japanese college students who came to visit Taiwan. The methods in this research are open-ended questionnaire and follow-up interviews for 103 Japanese learners in Taiwan with advance Japanese level. The results can be summarized into 3 points: (1) Specified the educational items in 8 aspects among intercultural communication between Taiwan and Japan. (2) Proposed suggestion in Japanese framework level (proficiency of vocabulary & grammar, constructing utterance) that is to adopt vocabularies & expressions systematically and concretely, while Japanese learners are preparing to introduce unique Gods, persons, affairs, things in Taiwan. (3) Proposed suggestion in Japanese interaction level(proficiency of problem saving, social speaking, fluently speaking)that is to help Japanese learners express their viewpoints humbly and logically ; to help learners know the deepened culture and history sensitively in Taiwan; to help Japanese learners understand Japanese humor by adopting Japanese humor materials in class; to instruct Japanese learners about preparation, simulation, recording and evaluation for the intercultural communication.

Keywords: trainees from Japan, Japanese interaction proficiency,
Japanese learners in Taiwan, framework level,
interaction level

台湾人日本語学習者と訪台日本人研修団の交流状況から考える対日交流能力の育て方

黄英哲
台中科技大学応用日本語学科准教授

要旨

本稿では「対日交流」の指導方法を具体化させるために台湾人日本語学習者と訪台日本人研修団の交流状況について話題、期待、不安、魅力、葛藤、場面、困難、表現の 8 つの面に注目して分析した。日本人台湾研修団とは、試合と見学のため台湾を訪れた日本人学生野球チームと、台湾の大学で行われたワークショップに参加した大学生団体のことを指す。調査の方法は上級レベルと思われる 103 名の台湾人日本語学習者を対象とした記述式調査とそれに基づくフォローアップインタビューである。結果は次の 3 点にまとめられる。(1)上記の 8 つの項目に見られた記述は今後対日交流の指導及びシラバスの設計で貴重な参考となる。(2) 枠組レベル（語彙文法、発話構成）の指導については、台湾ならではの神・人・事・物が紹介できるような語彙と表現を授業に計画的で具体的に導入すべきである。(3) 談話レベル（問題処理、社会言語、円滑的コミュニケーション）の指導については、問題処理能力の面では、相手の意見を尊重しながら論理的な反論により自分の考え方を伝える訓練が必要である。社会言語能力の面では、自国文化・歴史・現勢に対する気付きと感性を養うべきである。円滑的なコミュニケーション能力の面では、日本のお笑い芸能を題材として学習者のユーモアの発話力を訓練することと、学習者たちに交流前の準備・シミュレーション、交流中の記録、交流後の反省をしてもらうことを主張する。

キーワード： 日本人研修団、対日交流能力、台湾人日本語学習者、枠組レベル、談話レベル

台湾人日本語学習者と訪台日本人研修団の交流状況から考える対日交流能力の育て方

黄英哲
台中科技大学応用日本語学科准教授

1. はじめに

日本語学科が設置されている台湾の大学 43 の設立方針を確認したところ、33 校が「交流、コミュニケーション能力、国際観」等の用語を用いて、交流能力の養成を強調している。しかし、43 校のすべてが日本語能力試験（JLPT）1、2 級合格を卒業要件としており、その結果、多くの大学で JLPT の受験内容に合わせたカリキュラムデザインや授業が展開されている。教材としては、相変わらず「文法積み上げ式」の『みんなの日本語』、『文化日本語』[1]等の教科書シリーズが日本語塾や高校だけでなく、多くの台湾の大学でも使用されている。もちろん、大学の日本語学科は「発音」、「文法」、「読解」、「会話」、「作文」、「聴解」、「翻訳」、「歴史」、「文学史」等の多彩な必須科目を設定し、幅広い能力の養成に取り組んではいる。しかし、出口の目標が JLPT1 級であれば、口頭及び文章による伝達能力は測定されず、JLPT1 級に合格しても、教育方針に掲げられている「交流能力」がどれほど獲得されたのかは、不明である。日本語及び日本文化の受容的学習にひたすら浸らせるだけの教育は、自国文化への内省へと向かう態度や、自国の言語・文化と目標のそれの比較を通して見解を深め異文化と交流する能力を獲得しようとする姿勢を失わせているかもしれない。したがって、「対日交流」を上記の科目と同様、大学の応用日本語学科の必須科目として定着させることが必要なのではないかと考える。

[1]『みんなの日本語』シリーズの編者はスリーエーネットワークで、「文化日本語」シリーズの編者は文化外国語専門学校日本語科である。両シリーズの台湾発行所は「大新書局」である。

「対日交流」のための学習項目を具体化するには、まず、日本語学習者が実際に日本人と交流する時のコミュニケーションの現状、及び問題点を分析しなければならない。石井・岡部・久米（1995）によると、こうした異文化コミュニケーションの能力を養うにあたって、自文化把握、適応力、対人関係、交渉、問題解決、外国語教育等が大事だと指摘されている。図１に示す通り、石井・岡部・久米（1995）が指摘したものから示唆を得て、今回の研究で調査する項目を選定した。

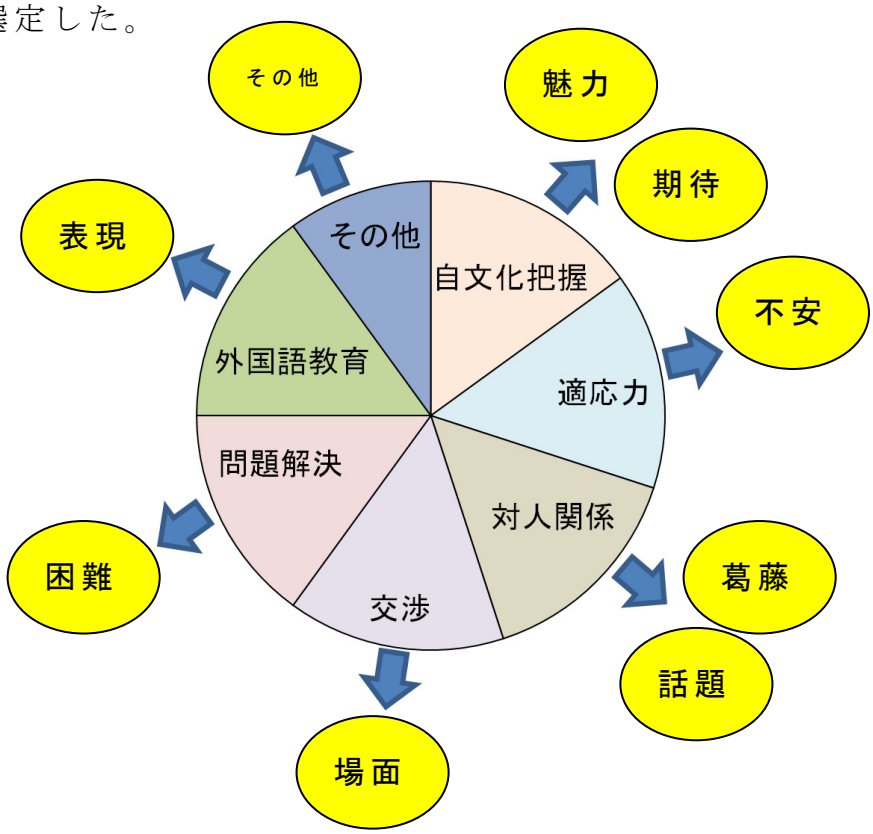

図１　石井・岡部・久米（1995）から得た示唆

即ち、本研究では台湾人日本語学習者と「日本人台湾研修団」と交流した場面での話題や会話の実際、感想等について、台湾人日本語学習者側の角度から「対日交流」に見られるコミュニケーションの特徴、問題点、改善点を以下８つの面から分析する。

①話題：よく話題に上った事柄。②期待：日本人に知ってほしい台湾の風物・事物。③不安：伝えたいことがうまく伝えられなかった事柄。④魅力：日本人が特に興味を持っている台湾の事物・風物。⑤葛藤：台湾に関する日本人の間違った印象。⑥場面：日本語で発

言しなければならない場面。⑦困難：フォローが難しいと感じられた話題。⑧表現：日本人が頻用する表現であるが自分には使用できなかった日本語。

2. 分析の方法

日本人台湾研修団とは、試合と見学のため台湾を訪れた日本人学生野球チームと、台湾の大学で行われたワークショップに参加した大学生団体のことを指す。調査の協力者は上述した研修団と交流するために派遣された日本語学科の台湾人大学生103名である。103名のうち、野球チームの通訳案内者が11名、ワークショップの参加者が78名、両方とも参加した協力者が14名である。

野球チームの通訳案内とは、「中華民国学生棒球連盟」の要請を受けて来台の日本人学生チームの通訳案内の協力をしたことを指し、台湾の大学で行われたワークショップとは、日台の学生たちが一緒に台湾を旅行したり、企業見学を案内したり、準備してきた報告内容を相手に口頭で紹介したりすることを指す。

台湾人大学生全員が JLPT の N2 レベル以上に合格している。調査と分析の手順は図 2 に示す通りである。まず、日本人研修団と交流した後に、交流の場での話題や会話の実際、感想等について表 1 に示す設問を母語で自由記述をしてもらった。実態をより具体的に把握するために選択肢で協力者の回答を限定せず、自由記述の形で回

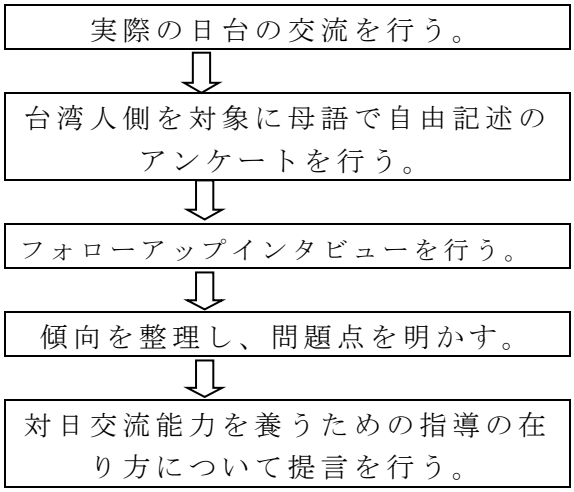

図 2　分析の手順

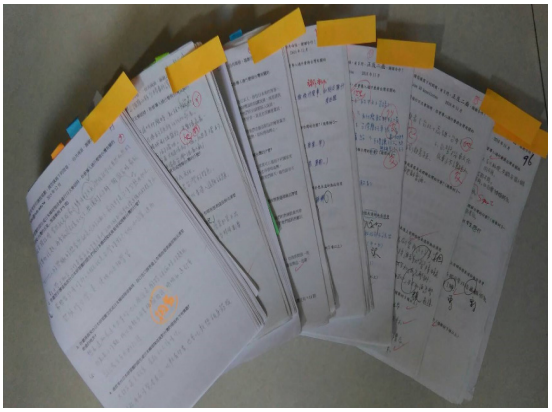

図3　回収した調査票

答してもらった後、筆者で傾向を分析した。図 3 は回収した 103 部の調査票である。調査票を回収した後、結果を整理し、不明な部分についてフォローアップインタビューにより協力者に確認を求めた。記述内容に何か傾向、特徴があるかについて分析した後、台湾人日本語学習者の対日交流能力を養うための指導の在り方について提言を行う。

表 1　調査票の設問について

設問の背景	実際の設問内容	日本語訳（要点）
話題:どんな話題が出たのか。	1.與來台日本研習團的師生或日本棒球隊成員進行日文會話時，你曾導入過什麼與台灣有關的「話題」?（請舉例 3～5 項）	1.よく話題に上った事柄
期待:日本人相手に知ってほしいものは何か。	2.你最想引導這些來台日本研習團的師生們或日本棒球隊成員看見或理解台灣的什麼?（請舉例 3～5 項）	2.日本人に知ってほしい台湾の風物・事物
不安:うまく伝えられなかった心境はどうなっているか。	3.你覺得與來台日本研習團交流或日本棒球隊成員時，自己在口語表達上有哪些想表達卻無法清楚表達的地方?（請舉例 3 項以上）	3.伝えたいことがうまく伝えられなかった場合
魅力:興味を持ってくれたものは何か。	4.通常來台日本研習團的師生或日本棒球隊成員對台灣的哪些地方有興趣?（請舉例 3 項以上）	4.日本人が特に興味を持っている台湾の事物・風物
葛藤:葛藤はどうなっているか。	5.你認為日本人對台灣有什麼樣的錯誤印象?（請舉例 3 項以上）	5.台湾に関する日本人の間違った印象
場面:日本語による発言の場面は何か。	6.在整個交流過程中，有哪些重要的場合必須由你用日文發言?（請舉例 3 項以上）	6.日本語で発言しなければならない場面
困難:フォローできなかったものは何か。	7.你曾遇到哪些狀況，日本人提出的「話題」你卻似乎難以跟進?（請舉例 3 項以上）	7.理解、同調、協調が難しいと感じられた話題
表現:できない表現があるかどうか。	8.請舉幾例和來台日人交流後，發現他們常用的日語表達，而你卻一直不會使用的。（請舉例 3 項以上）	8.日本人が頻用する表現であるが自分には使用できなかった日本語

3. 先行研究と本稿の関連

異文化コミュニケーションが行われる際、より意義のある交流をさせるべく、交流当事者の交流能力を体系的に培わなければならない。そうした能力を培うにあたって、真嶋（2006）が指摘した通り、交流当事者たちに同化や適応をさせるのではなく、共育させることを目指さなければならない。日台交流における教育の在り方につい

ては下記の賴(2012,2017) と林(2014)の指摘は今後の指針となる。

自文化と目標言語の文化を比較することによって異文化交流能力を身に付けることが大切である。(賴 2012:20)

外国語学科の学生として、ただ目標言語の文化を受信するだけではなく、対等の立場に立ち、自国文化を発信していくことも可能である。(林 2014:371)

台湾事情を日本語で発信できるような能力を育成しようとするならば、社会的な文脈を考慮に入れる日本語教育活動が必要である。(賴 2017:192)

近年日本から台湾の大学を交流に訪れる人々が増加する傾向が見られる。村上 (2012)、文野・工藤 (2012) 、桂田 (2015)、工藤 (2015,2017)、張 (2017) 等はそれを機に訪台交流の実際から、学習者の成長について調査・研究を行っている。

村上 (2012)は 4 名の日本人研修生を対象に学習日記と授業のビデオを通して研修生の達成感と挫折感を観察した。桂田 (2015) は日本人を含む 28 名の外国人大学生が台湾の大学へ短期留学に来た場合をハイブリッドと呼び、大学の授業への出席、地元の言語文化との接触によって著しい教育効果が見られたことを指摘した。

村上 (2012)と桂田 (2015) はともに来台した外国人研修生の知的成長を観察したのに対して、文野・工藤 (2012) は来台研修生と現地の台湾人大学生の双方を対象に分析し、工藤 (2017)、張 (2017) は現地の台湾人大学生を対象に交流がもたらした「学び」を分析した。文野・工藤 (2012) はいわゆる日台プロジェクト型交流の日台双方 2 名ずつの参加者を対象にインタビューを行ったあと、交流当時者たちが働きかけ合いの意思疎通によって「自分の言葉」、「自らの考え」、「知識」の成長に繋げられたことを報告した。工藤 (2017) は、15 名の協力者を対象にグループワークの過程と学生の自己評価を分析し、学習効果が高い交流環境を作るには、問題解決の課題設計、課題認知の事前確認、協働と「足場作り (scaffolding)」の応用が大切であることを強調している。張 (2017) は工藤 (2017) と

同じ協力者のデータを基に、交流による言語行動（思考・表現・伝達・交渉を含む）について分析した。それらの言語行動は社会的領域と心理的領域の二つに分けられ、その役割については前者には対人関係または課題遂行のためのものがあり、後者には「日本語をしゃべる自分への認識」または「意味の構築/再構築」のものがあるとしている。

以上の先行研究で提示された指導例は、台湾人日本語学習者の対日交流能力育成を目指す教育現場に示範と方向性を提供していると考えられる。本稿では先行研究の指摘を踏まえて、多人数による体験と所感に基づき、台湾人の対日交流能力を育てるための授業のシラバスの具体化に貢献したい。

4. 対日交流能力とは

筆者が勤務している応用日本語学科の三、四年生 143 名を対象に「日本語による伝達能力の自身の期待」という意識調査（2012 年 2 月～2013 年 12 月）を行ったところ、143 名のうち 106 名がいつか日本人のように流暢に日本語を操りたい(74%)と答えた。本研究ではそれを達成するには図 4 に示された知識・技能のすべてが必要となると考える。

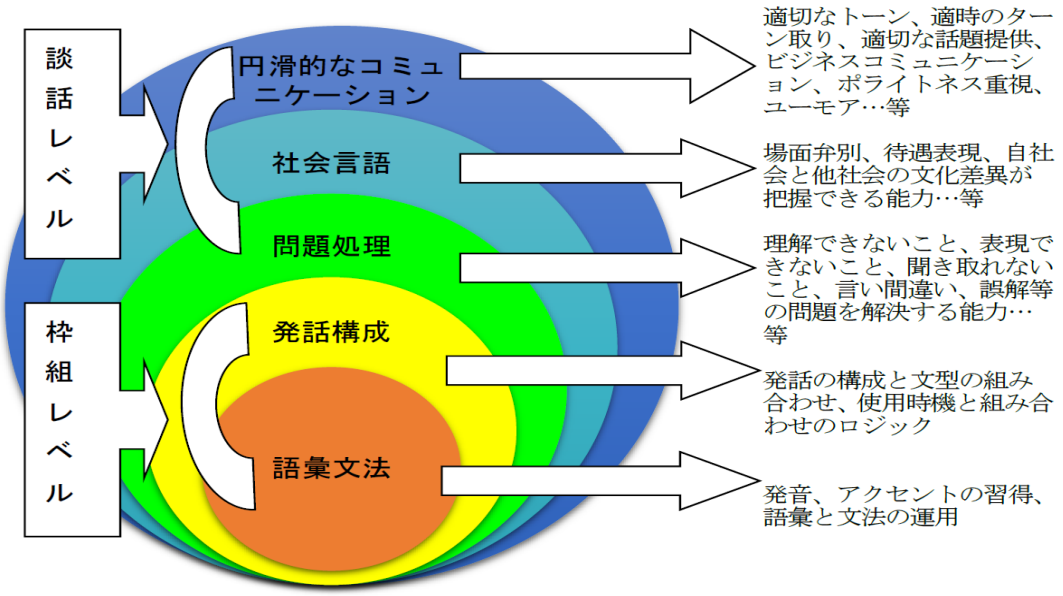

図 4　理想的な外国語教育

台湾の日本語教育の現場が、時間数等、様々な条件の中で「枠組レベル」の教育に追われ、「談話レベル」の教育に対応しきれていないことは否定できない。しかし、学習者の大多数が「円滑的なコミュニケーション」ができるようになりたいと望んでいる以上、それができる教育体制を考えなければならない。本研究では、対日交流能力の養成には「談話レベル」に重点を置くべきだという前提に立ち、対日交流能力とは何かを具体化するために、実際に交流した後の意識調査に基づいて、上級レベルの台湾人日本語学習者がどのような技能や知識に不足を感じているかを示す。

5.分析の結果

日本人研修団と交流した後に、交流の場での話題や会話の実際、感想等について８つの設問を示して、上述した協力者たちに自由記述をしてもらった。以下に８つの面から分析結果を示しながら、教育指導の提言を述べる。

5.1　よく話題に上った事柄

交流時よく話題に上った事柄を表 2 に示す。括弧の数字は言及されている回数である（以下、表 3～表 8 についても同様）。表 2 における「内容」の欄には一見繁雑に見えるが、「話題」の欄に示した通り、よく取り上げられた話題について上位の 19 項目に集中している。交流する際もっとも話題に上ったのは台湾ならではの食べ物である。そこで、取り扱われている話題の項目の一覧を図 5 のように整理した。

表 2　よく話題に上った事柄の内訳[2]

話題	内容
美食・グルメ(77)	臭豆腐、タピオカミルクティー、パイナップルケーキ、ショウロンポウ（小籠包）、太陽餅、ホテルの朝食、ヨモギ入りのお餅（草仔粿）、刀切りヌードル（刀削麺）、おかし、デザート、マンゴかき氷、果物

[2]本稿では、日本人に広く知られているかぎり、音訳をせず、意訳や直訳をする。

	（バナナ、蓮霧、グアバ、しゃか、マンゴ、台湾スイカ）、ヌガー（牛軋糖）、麺類、屋台料理、庶民料理、インスタントラーメン、手作りの氷入りドリング（手搖冰）、ビスケット、台湾チャーハン、台湾チャーメン、台湾式のフライドチキン（雞排）、台湾流の焼肉、甘豆腐プリンスープ（豆花）、水餃子、牛肉ラーメン、台湾柚子、豚肉のでんぶ（肉鬆）、肉入りもち（肉圓）、台湾流かき氷、タロイモの団子（芋圓）、アイスクリームの多様さ、大根干しの卵焼き（菜脯蛋）、台湾ソーセージ、なべ料理、台湾ピーナツ、豚の血の糯（豬血糕）、お茶の葉っぱで煮込んだ卵（茶葉蛋）、台湾式鶏の唐揚げ(鹽酥雞)
台湾人の習慣(51)	乾杯文化、仕事観、結婚観、命名の仕方、トイレットペーパーの捨て方、ごみの出し方、台湾文化、宗教、ライフスタイル、お茶の飲み方、結婚式の行い方、ウェーディングドレス、本音と建て前の認識の日台の差異、親日、台湾文化、宗教、飲食習慣、冬至の伝統、夜の公園文化（ダンスするおじとおば、スケートする子供たち)、お寺・お宮、伝統的慣習、職場の文化、台湾の政治文化（選挙等)、夜市文化、お正月の慣習（年玉等)、ノービーフ主義、台湾女性の素顔、色の使用、マスクの使用、バスの乗り方、台湾企業、台湾人の国民性、水道水の使い方、SNS、年越しカウンダウン、タブー、中秋の焼肉
観光スポット(40)	夜市、九份、101 ビル、台北西門町、一中街商店会、昔ながらの店舗、忠烈祠、龍山寺、日月湖(日月潭)、春水堂、宮原眼科アイスクリーム
気候(25)	台湾南北の差異、最近の天気、台風、台湾の暑さ、台湾の蒸し暑さ
キャンパスライフ（25）	学部のカリキュラム、大学の周辺、大学の歴史、授業時間、授業数、体育、グランド、運動場、英語能力、教育制度、学校の時間割、台湾の学制
交通(22)	市内の無料乗車券、バス、バイク、通勤の手段、台湾の高鐵、徒歩者専用の信号の特徴、交通の混乱状態、高速道路の料金の支払い方、信号無視、徒歩者の注意事項、右寄りの車、ハンドルの位置、
使用言語（16）	台湾語、注音符号の使用、繁体字の使用、台湾華語、台湾華語と中国語の発音の差異、台湾流行語、他人を貶す時の言葉、
建物(12)	歴史的建築、日本統治時代の建物、総統府、古跡、建物の特徴
ポップカルチャー（10）	映画・KANO、アニメ・千と千尋の神隠し、君の名は、映画湾生、日本のバラエティー番組、日本のトレンディドラマ、台湾の古代劇、アーティスト
各地の産物（9）	台湾の農産品、台湾各地の名産品、お土産、地方産業
お祭り（9）	節句（中秋)、提灯祭り、旧暦の七月
スポーツ（8）	日本で活躍した台湾人野球選手
課外活動（8）	アルバイト、就職活動、就職の準備、大学生のレジャー、サークル、部活
旅行プラン（7）	やりたいこと、行きたいところ、買いたいもの、食べたいもの
台日関係（6）	歴史上の因縁、日本統治時代、台日企業、自動車産業
違和感（5）	変わった食べ物（豚の血の糯)、「お茶の葉っぱの卵煮」のにおいが変わっている、臭豆腐、慣れないところ、挙手しないとバスが止ま

	ってくれないこと
物価（4）	スマホの周辺グッズ、食べ物、足つぼのマッサージ、散髪、車の免許の試験の検定料はやすい
地理（4）	台湾の首都、田舎、都会
台湾のイメージ（3）	台湾に関する印象、好きなところ、日本と違うところ、台湾への第一印象
その他（10）	台湾の男子と日本の男子、台湾の年号、台湾の花、原住民文化、台北 MRT の飲食禁止、台湾の最近の出来事、台湾の歴史、台湾オペラ（歌仔戯）、実家（自分と相手の出身地）、化粧品、宝くじのような消費後のレシート

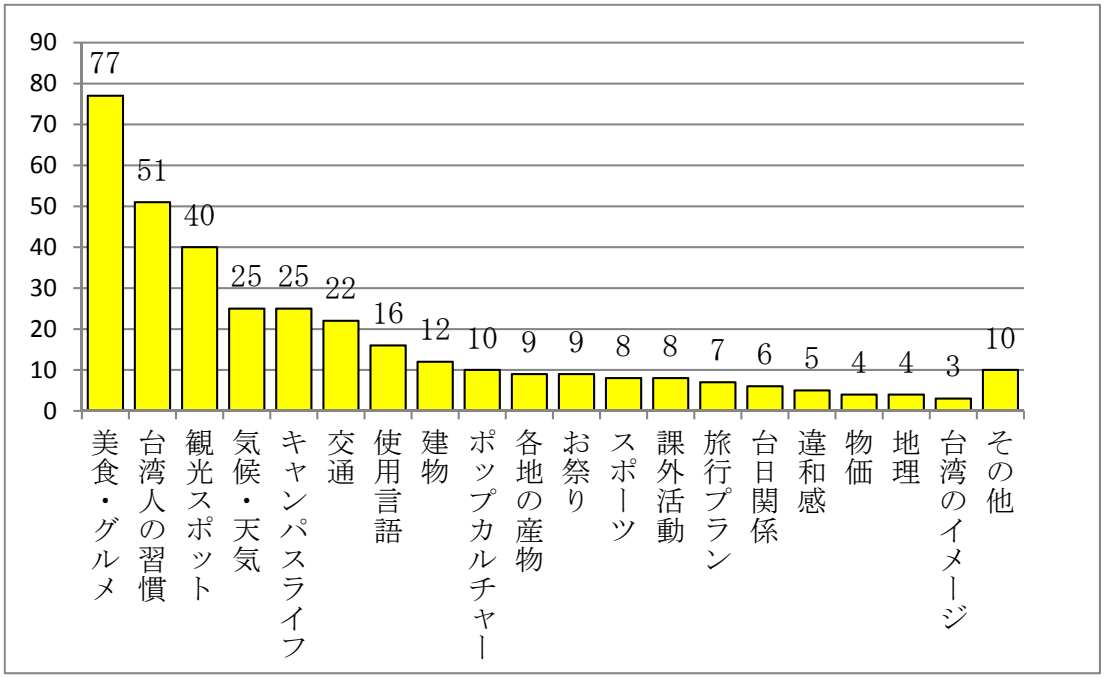

図 5 よく話題に上った事柄のランキング

この部分の分析から分かったのは、日本語教師も学習者も自分の国の食べ物、観光地、国民の性格等について改めて考えなければならないということである。フォローアップインタビューでは、一台湾人としては長年台湾で生活を送ってきたのに、自国文化の持ち味、生活慣習の特徴、国民の生活習慣等についてかえって気づきにくい部分があると語った協力者が多い。例えば、台湾ならではの食べ物（「芋圓、豆花、肉圓」等）の食材、作り方等について普段の授業で確認する必要がある。表 2 でまとめた事柄は一見繁雑に見えるが、交流の際に話題となる可能性が高いので、教科書や授業の題材とすべき項目を考える上での参考情報となる。

5.2 日本人に知ってほしい台湾の風物・事物

図 6 に示す通り、協力者たちが日本の人々にもっとも知ってほしいものは台湾人の国民性である。学習者たちは台湾の食べ物以外に様々な文化的なもの、ユニークなものを紹介すべきだということを認識しているようである。即ち、食べ物もさることながら、来台の日本人により知ってもらいたいことは国民の性格、価値観、考え方等人間性の特徴である。したがって、教育現場では、学習者たちに初心に戻ってもらい、来台日本人に知ってほしい物事の日本語表現を指導すべきである。

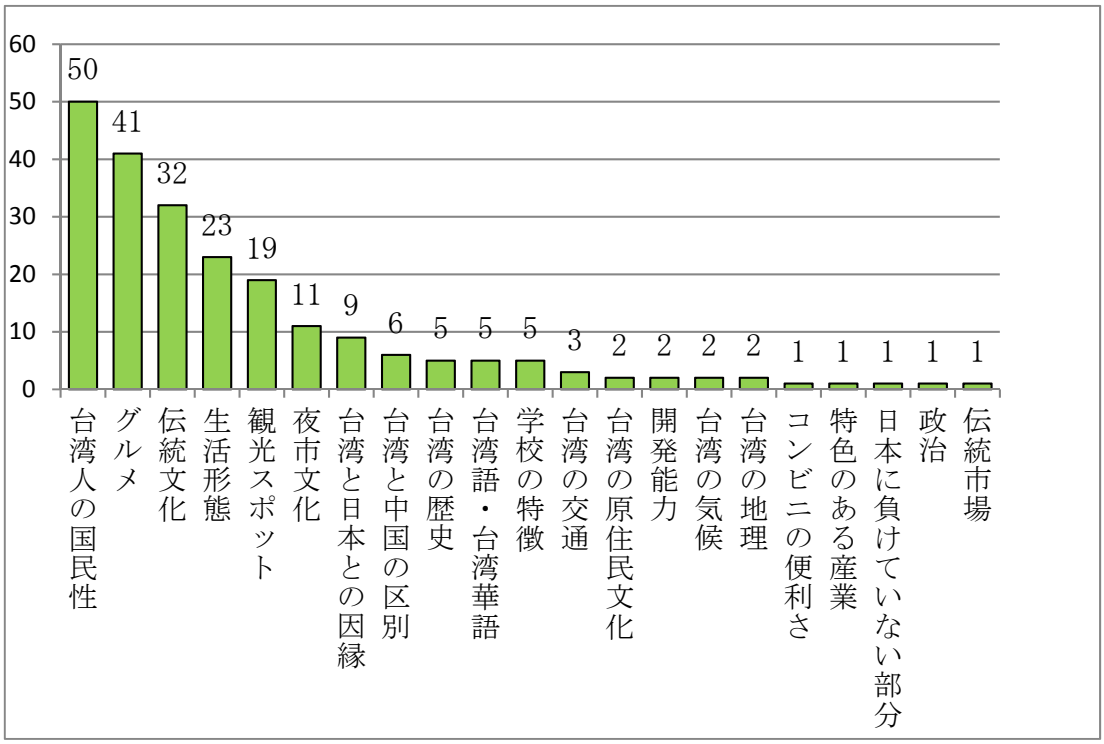

図 6 日本人に知ってほしい台湾の風物・事物

5.3　伝えたいことがうまく伝えられなかった場合

この設問では日台交流時台湾人側が不安に思う自分の日本語表現についての心境を窺った。その結果、表 3 に整理した通り、「日本語に相当する表現が分からない。」「観光用語を使用する時に不足さを感じた。」「料理・食べ物を説明する時に限界を感じた。」等の不安が上位として現れている。表 3 の内訳の欄に具体的に語ってくれた内容をまとめた。また、図 7 はこの部分のランキングである。

表 3　伝えたいことがうまく伝えられなかった場合

項目	内訳
日本語に相当する表現が分からない。(47)	台湾特有のものを日本語でうまく伝えらない（「仙楂餅、仙草、西米露、菱角等[3]」)。できる語彙量が少なすぎた。台湾語の表現（「吐槽[4]等」)、台湾の若者の表現（「狂、雷、潮[5]等」）をうまく日本語で伝えられない。台湾のことわざの日本語化（「瞎貓碰上死耗子[6]等」）
観光用語を使用する時に不足さを感じた。(31)	景色、行楽地の紹介（故宮博物館、科学館、孔子のお宮、古跡)、空港の場面（両替、レート、ターミナル）歴史、伝統文化、風習等、信仰(お寺、お宮、線香、供物、「慈済[7]」、「千里眼、順風耳、擲茭、跪拜、舞龍舞獅、金紙[8]」等、台湾の神等）、伝統市場、夜市文化、原住民文化、道の案内、消費する場面（サービス料、割引、相席、割り勘等）
料理・食べ物を説明する時に限界を感じた。（29）	味の表現の仕方、台湾における特有な食べ物の紹介（「肉圓、檳榔（ビンロウ)、伏苓膏（漢方薬のぶくりょうのジェリー)」等をどのように紹介するのか。「蛋餅（ねぎと卵焼きの塩焼きクレープ)、大腸包小腸（もちごめ入りの台湾ソーセージ)」等の適切な中国語訳はどうすればいいのか、「豆干」「豆腐」「豆包」[9]の区別はどう説明したほうがいいのか等）
特定の分野でよく用いられる用語ができない。（19）	野球、経済、産業、ネット用語、病院、ゲーム、陶器（焼き物等）電気製品の部品、葬式（火葬、葬式場等）
長い発話ができない。(14)	発話が途切れ度切れとなっていること
通訳に困難がある。(12)	台湾語の意味すら分からないのに。適切な中国語表現に自信がない。
敬語のスイッチが苦手だ。(5)	敬語表現に自信はあまりない。
その他の心配点（14）	迅速に回答すること（3)、外来語（3)、類義表現（3)、台湾の笑い話をすること（2)、動詞（2)、オノマトペ、質問、断り、討論等（1）
無回答（2）	

[3]仙楂餅：甘梅の粉クッキー。仙草：せん草入り寒天。西米露：タピオカ。菱角：菱の実。
[4]吐槽:相手の発話内容に対してわざと突っ込むことを指す。
[5]狂:がむしゃら。雷:空気が読めない相手の行動や発話で頭に来ることを指す。潮：おしゃれ。
[6]瞎貓碰上死耗子：開いた口へ牡丹餅。
[7]慈済：台湾の宗教団体。
[8]千里眼、順風耳：航海の守護神・女神の「媽祖」を護る随神。擲茭：センペイ占い。跪拜：土下座して拝む。舞龍舞獅：龍の舞と獅子舞。金紙：紙銭。
[9]豆干：味付け押し豆腐。豆包:大豆の固まり蒸し。

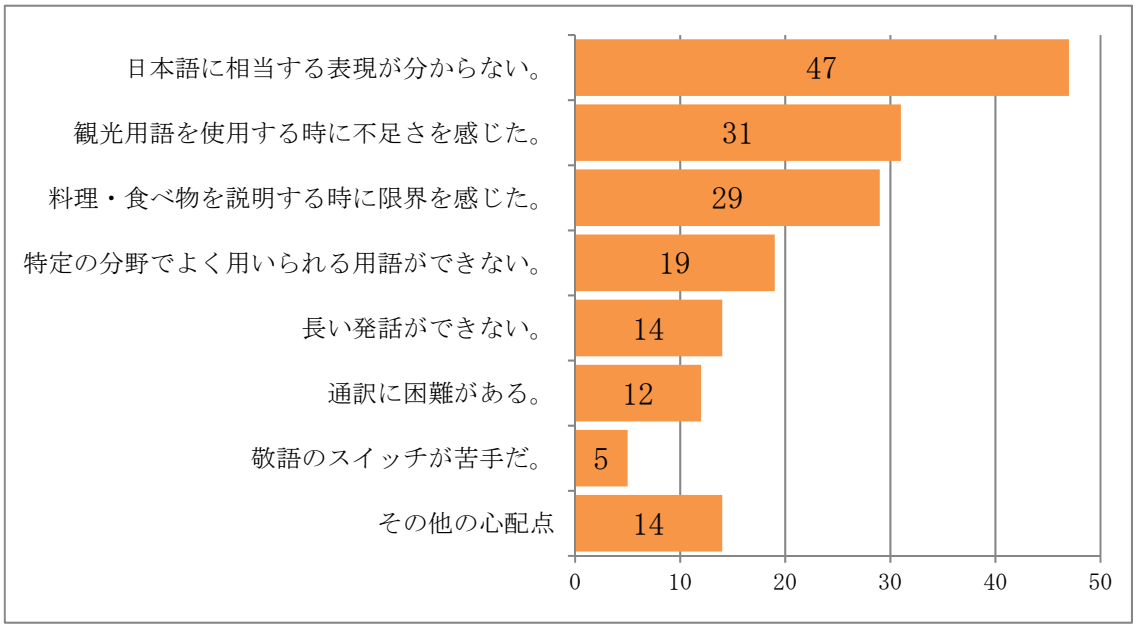

図 7 伝えたいことがうまく伝えられなかった時の心境のランキング一覧

全体的には協力者たちは日本語によるコミュニケーション力が不足しているという認識を持っているようである。特にうまく伝えられなかった項目として台湾の特有な物事を挙げる人は多い。しかし、外国語学習の到達点はその外国語が使用されている国を理解するのみならず、自分の国の事情や特徴をその外国語でその国の人々に伝えられることである。

教育現場では練習、試験、特訓に止まらず、学習者自身に口頭伝達の改善点を気付かせることも大事である。例えば、「長年日本語を勉強したのに、文法と発話の構成力がやはり不足しているのはなぜなのだろうか。」「口頭伝達の弱点を克服するためにはどうすればいいのだろうか。」「台湾特有だと思われる物事、文化、歴史等があれば、その由緒を追求したらどうだろうか。」等と言った問題意識を喚起しなければならない。特に大学で日本語を専攻している学生たちには、日常生活以外の日本語、自分の興味として挙げられる分野の日本語に関する自主的学習もしてほしい。

5.4 日本人が特に興味を持っている台湾の事物・風物

この部分の調査によると、夜市・屋台、観光スポット、食べ物・飲み物・土産等の項目が上位に現れる（表 4 及び図 8 を参照）。すで

に設問 1 で挙げられた話題の調査の結果に類似したものがあるが、やはり興味のある物事は話題として取り上げられることが分かった。

表 4　日本人が特に興味を持っている台湾の事物・風物

項目	内訳
夜市・屋台(55)	夜市、屋台
観光スポット(49)	行楽地、観光名所
食べ物・飲み物・土産(37)	外食、果物、お菓子、ビンロウ、庶民料理等
バイク(12)	バイクの多さ及び利用
台湾の歴史・風習・伝統文化(11)	歴史の変遷、地元の文化等
台湾の宗教関係(10)	お寺とお宮、民間信仰等
学校生活(9)	学生生活等
市場・スーパー・デパート(8)	伝統的な市場、スーパー、コンビニ等
言葉・使用言語(7)	台湾華語、台湾語、中国語等の使用等
生活習慣・家庭生活(7)	日常生活の慣習
建物(7)	歴史のある建物、古跡、有名な建物等
美男・美女(5)	台湾人の外見
日本と関連のある物事(4)	台湾に輸入した日本の品物等
野球関係(3)	試合、グランド、名選手、チームの実力等
台湾人の親切さ(3)	台湾人の性格
映画に出てきた台湾のシーン(2)	千と千尋の神隠し等
文化差異(2)	台湾と日本の差異
ソープ(2)	石鹸、ソープの種類の多さ
マッサージ(2)	マッサージの値段、仕方等
街の看板(2)	看板の内容及び漢字使い等
日本料理屋(2)	居酒屋等
台湾の流行(2)	最近はやっている台湾の品物
その他	パチンコ、ごみの処理、レジャー、伝統的なおもちゃ、 ケーブル TV、お墓、美容院、床屋、台湾の若者の考え方、台湾の人口 、政治に対する熱心さ、U-bike、娯楽、バス

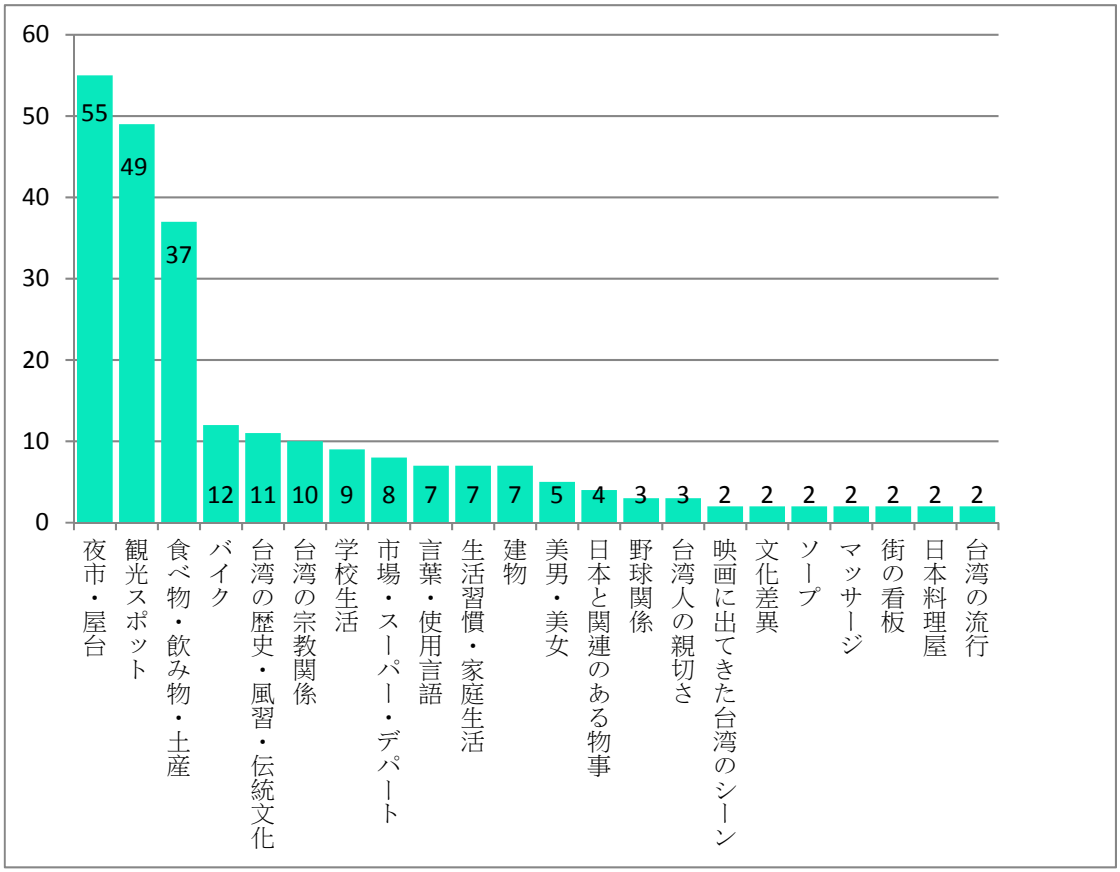

図 8　日本人が特に興味を持っている台湾の事物・風物

この部分の調査の結果では、ジャンルとしては今回 36 項目(その他を含む)抽出できたが、違う年齢層の日本の人が台湾の異なる面について興味を持つので、枠組レベルの学習の中にこうした談話レベルの題材を取り入れたら、一石二鳥の指導になりそうである。

5.5 台湾に関する日本人の間違った印象

この設問を通して、異文化接触による葛藤について調べた。即ち、台湾を訪れた日本人との接触で感じた相手の誤解を明らかにしたい。分析の結果を表 5 と図 9 にまとめた。

表 5　台湾に関する日本人の間違った印象

項目	内訳
使用言語（27）	全員台湾語ができる。日本語は共通語の一つとして台湾で用いられている。中国語さえできれば、台湾で十分コミュニケーションを取ることができる。台湾人の英語力を疑う。
国民性（27）	全部親切な人だ。ルールと時間を守らない人が多い。声が大きい。上下関係がはっきりしない。

衛生面（25）	街がきたない。屋台がきたない。ごみが多い。トイレットペーパーを流さない。ごみを分類しなくていい。公共トイレにはトイレットペーパーが提供されていないところが多い。ポイ捨てやビンロウ屑が多い。
気候（21）	冬も暖かい。
発展の遅れ（21）	退屈なところだ。田舎っぽい。治安が悪い。海賊版が多い。学歴が低い。
食事面（20）	全部おいしい。普通の食事はまずい。匂いが強い食べ物は多い。外食が多い。台湾人全員は臭豆腐が好きだ。中華料理イコール台湾料理だ。食べ物に香味料を入れすぎた。パナップるケーキ等をいっぱい食べている。ビンロウは普遍的な食べ物である。動物の内臓が好きだ。甘いお茶が好きだ。
中国との区別（14）	台湾は中国の一部である。文化も風習も同じだ。
低物価（8）	あらゆる品物が安い。
女・男性観（8）	外観、性格
交通面（6）	交通が悪い。交通が乱れている。
台湾の地理（4）	本島しかない。都市の位置。
意見なし（5）	
その他（15）	台湾の政治。大学生はほとんど運転できる。規定が変なところは多い。台湾の産物はパイナップルケーキしかない。自動販売機では札が使えない。お箸をあまり使わない。兵役は募集制だ。日本に似ている国だ。主婦は子供の面倒をすればいい。歩くのが好きだ。売店は全部 24 時間営業になっている。日本についてあまり知らない国。美女子・美男子が多い。授業が楽だ。
上述したものと正反対の意見（5）	安全な国だ。交通がいい。台湾はきれいなところだ。

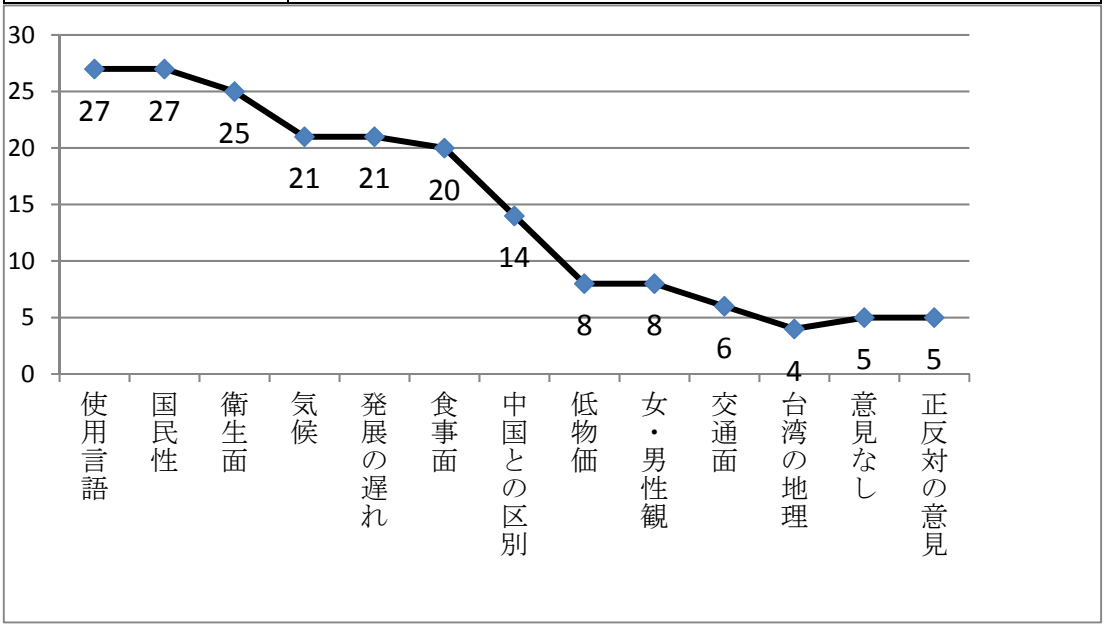

図 9　台湾に関する日本人の間違った印象のランキング

表 5 に示す通り、日本人の誤解だと思われたものの上位は使用言語、国民性、衛生面、気候、発展の遅れ、食事の面等である。しかし、図 9 の左半分に注目すると、上位 6 項目間の数の差は 7 となり、大きな違いはない。況して、治安や交通状況の面では正反対の意見も出ているのである。それは異文化の接触で生じる葛藤は特定の項目に集中するのではなく、様々な点で誤解を招く可能性があるからであろう。

異文化理解においてステレオタイプや偏見の存在は免れないが、それを防ぐための指導が求められる。例えば、「台湾人全員台湾語ができる。日本語は共通語の一つとして台湾で用いられている。中国語さえできれば、台湾で十分コミュニケーションを取ることができる。台湾人の英語力が弱い。」等と言った点で日本人から明らかな誤解が生じやすいと分かれば、学習者に対する普段の教育指導において、台湾の多言語、他民族の紹介を授業に導入すべきである。また、授業では、表 5 に指摘された事柄のうち、結論が定まらないものを取り上げて、学生たちに討論させる活動を取り入れれば、実際の交流には役に立つに違いない。即ち、相手の意見を尊重しながら、論理的な反論により自分の考え方を伝える訓練があってほしい。

5.6 日本語で発言しなければならない場面

日本人研修団体はせっかくゲストの形で台湾を訪れてきたので、ホスト側の台湾の共通語若しくは、英語で交流活動を行うことができれば、海外研修の意義が深まる一方、研修生自身の語学面での成長にも繋がる。せっかくの海外研修なのに、一方的に母語を用いて台湾の人に話すということは不平等だという側面がある。

しかし、日本語がある程度できた台湾の人は、日本語を実際に使ってみたいという狙いがあって、台湾を訪問した日本人団体と接触するときに大抵日本語をベースにしてコミュニケーションを行っているのである。今回の大学日本語専攻の協力者たちも当然のように、

来台の日本人と日本語でコミュニケーションを取っている。もちろん、場合によって、身振り、手振り、筆談、英語、台湾華語等で交流を行った部分もあったが、今回の調査では、「日本語でないと、やはり不自然だ。」「日本語が必要だ。」という場面はどれかについて調べたところ、表 6 及び図 10 に示す通り、「説明・通知」の場合が際立っている。それはホスト側を務めている台湾人大学生が台湾人の親切な一面をアピールしていたからのである。

表 6　日本語で発言しなければならない場面

場面	内訳
説明・通知（78）	自己紹介、レストランのメニュー、観光スポット、道の案内、日程・スケジュールの説明、規則の説明、国の言葉・歴史の説明等
日本語通訳（41）	対象：メンバー間、監督、病院、記者、店員、係員等 内容：ルール、注文、取材、チェックイン、チェックアウト、症状等
発表・討論（35）	決められた課題をクリアするため
歓迎・歓送（33）	司会進行、感想陳述
その他（6）	企業見学、食事等

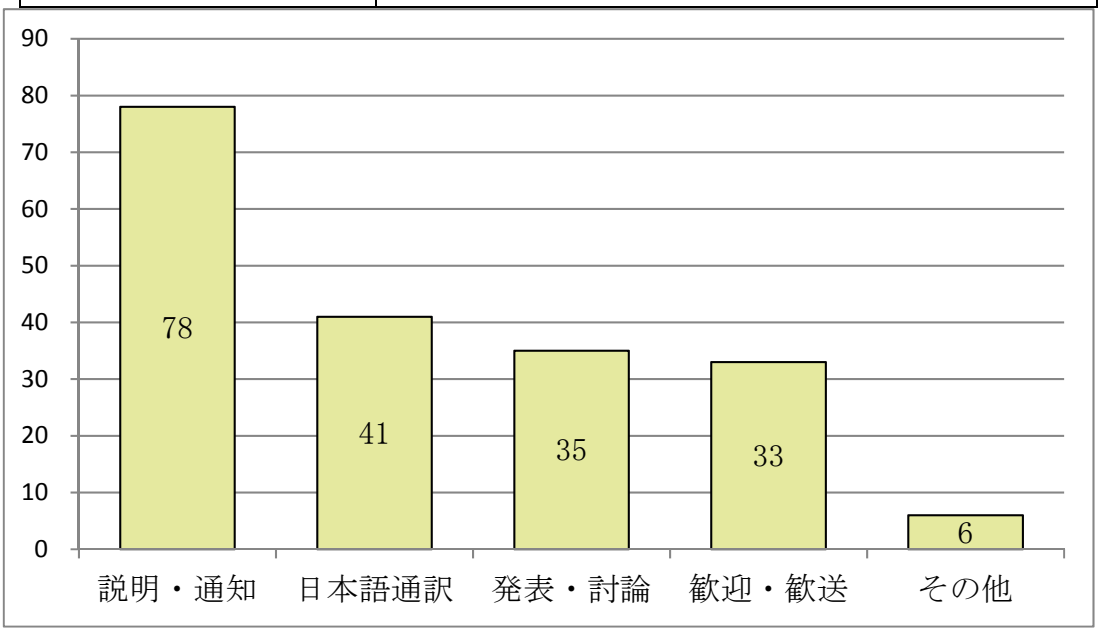

図 10 日本語で発言しなければならない場面

厳しい国際環境に置かれている台湾にとっては、相手の言語（日本語）を通して台湾のことに興味を持ってもらうことは有利な外交の武器の一つかもしれない。したがって、台湾の日本語教育では、学習者たちに以下の姿勢が取れるような指導をすべきであることを主張する。即ち、日本人研修団に、最初は日本語で台湾のことを理解してもらう。その後台湾の味方になってもらう。最終的な目標は台湾の言語や文化を学んでもらうことが最善であろう。

この部分の調査結果に基づくもう一つの提言は「アドリブを最小に、シナリオを最大に」ということである。言い換えれば、日本語でコミュニケーションを取らなければならない場面は説明、通訳、発表、歓送迎に絞られる以上、準備は難しくなくなる。日本語教材の編纂やシラバスの編成においてこの部分の枠組レベルの知識、談話レベルの知識の伝授にもっと力を入れるべきである。

5.7　フォローが難しいと感じられた話題

先述した設問 3 で協力者が交流した時の失敗か不安について調べたのに対して、この設問では、日本人が提示した話題についていけるかどうかについて調べた。その結果、表 7 と図 11 に示す通り、映画・アニメ・芸能、日本式ユーモア、レジャー・スポーツが上位に挙げられている。

表 7　フォローが難しいと感じられた話題

項目	内訳
映画・アニメ・芸能(38)	バラエティー番組、タレント、歌手、俳優、ティレンディドラマ、アニメ等
日本式ユーモア(16)	駄洒落、笑い話等
レジャー・スポーツ(16)	サッカー、おつり、行楽地、部活、日本のゲーム、野球、ゴルフ、日本人向けのトランプ、ネットゲーム等
専門知識(13)	カメラのパーツ、野球バットの材質、香水の製造過程、見学した工場、ビジネス、経済、野球審判の免許、ほかのチームの実力、儒学、料理の作り方等

最近の日本の出来事(14)	日本のファッション、流行の話題、祭典等
日本の歴史・祭典(10)	おまつりのイベント、歴史人物等
日本の流行語(10)	若者用語、ことわざ等
男女関係(9)	結婚、恋愛等
台湾の政治(7)	選挙等
台湾の歴史・文化(8)	中国と日本との因縁、台湾の信仰等
相手の学校(6)	相手のクラスメート、サークル、相手の大学のこと等
日本の方言(6)	関西弁等
日本の観光スポット(5)	日本の地理等
進路・就職(5)	就職等
台湾の飲酒・煙草文化(4)	台湾のおいしいお酒等
台湾の車のブランド(4)	乗用車のメーカー等
動植物の名称(3)	野菜の名等
相手の実家(3)	日本のふるさと等
日本各地の名産物(3)	日本各地のお土産
プライバシーのこと(5)	他人事等
台湾の観光スポット(3)	台湾の地理、都市等
その他(14)	日台鉄道、台湾の税金、日台企業、台湾以外の外国、簡略字と繁体字の区別、台湾の食べ物のまずさ、台湾の賃金、化粧品、アルバイト、 台湾の料理、日本の食べ物、台湾に関する物事全般、日本人が無口な場合、相手が話すスピードが速い場合等
意見なし(5)	

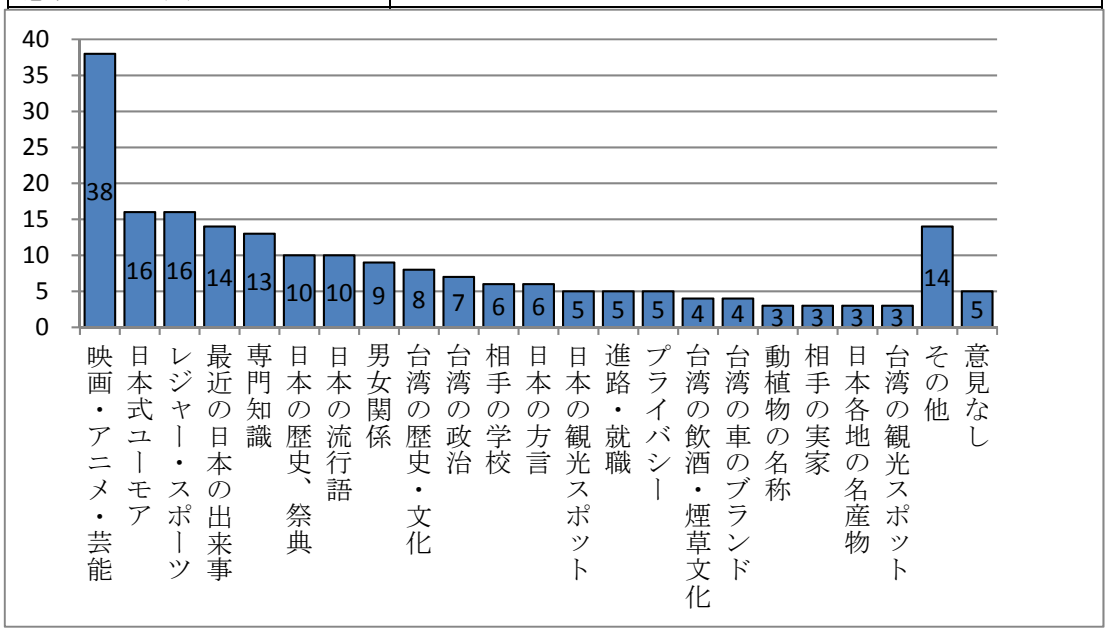

図 11 フォローが難しいと感じられた話題

上位三位の項目はすべて行楽関係のものとなっている。興味深いことに、日本交流協会（2010）の調査によると、台湾において、78.8%の高等教育機関の日本語学習者が日本語学習の目的について日本文化知識（サブカルチャーも含む）を獲得したいと答えているのに対し、今回の調査では、大学生である協力者たちは実際に日本人と交流する際、映画・アニメ・芸能に関する話題や発話に乗りにくいと答えている。これらサブカルチャー的なものは多くの台湾人日本語学習者が日本語を勉強し始めたきっかけであるにもかかわらず、学習歴が増えるにつれて、相手のこの部分の話にかえってフォローできないのは何故だろうか。そこで、相手の話にフォローできない時にも、関連したもので自分が詳しい領域に話題を誘導する技術を学習者に伝授することを勧める。また、意思疎通ができるように訓練を受けてきた学習者たちは、ユーモアのある発話をする能力はどれぐらい持っているのだろうか。表 7 と図 11 にも見られるように、多くの協力者は日本式ユーモアに全然フォローできなかったことが分かった。今後研究面では、日本式ユーモアを分析する一方、教育面では、日本の漫才、大喜利、バラエティー番組の内容を題材として現場の指導に導入することを主張する。

5.8 馴染まない日本語の表現

この部分の調査では、交流時日本人が頻用する表現であるのに対し、自分には何だか苦手だということをどのように自覚しているかについて調べた。分析の結果を表 8 及び図 12 に整理した。流行語、ことわざ、俗語、若者の表現、ネット用語を総じて慣用表現とすれば、それらが協力者たちにとって、「馴染まない日本語の表現」の一位であると考えられる。

表 8　馴染まない日本語の表現

項目	内訳
慣用表現等（52）	流行語、ことわざ、俗語、若者の表現、ネット用語
身近な表現等（34）	接続詞、感嘆詞、生活上の用語、症状の表現
方言（28）	大阪弁等
縮約表現（18）	縮約、略語
待遇表現（11）	スピーチレベルのスイッチ、敬語、類義語
オノマトペ（8）	擬声語、擬態語
曖昧表現（6）	単刀直入ではない返答
使役・受身・授受表現（5）	使役表現、受身表現、授受表現
ユーモアの醸し出し方（4）	駄洒落、お笑いの表現
その他（6）	発表時の表現、助詞、テンスの使用、形容詞の使用
意見なし（12）	

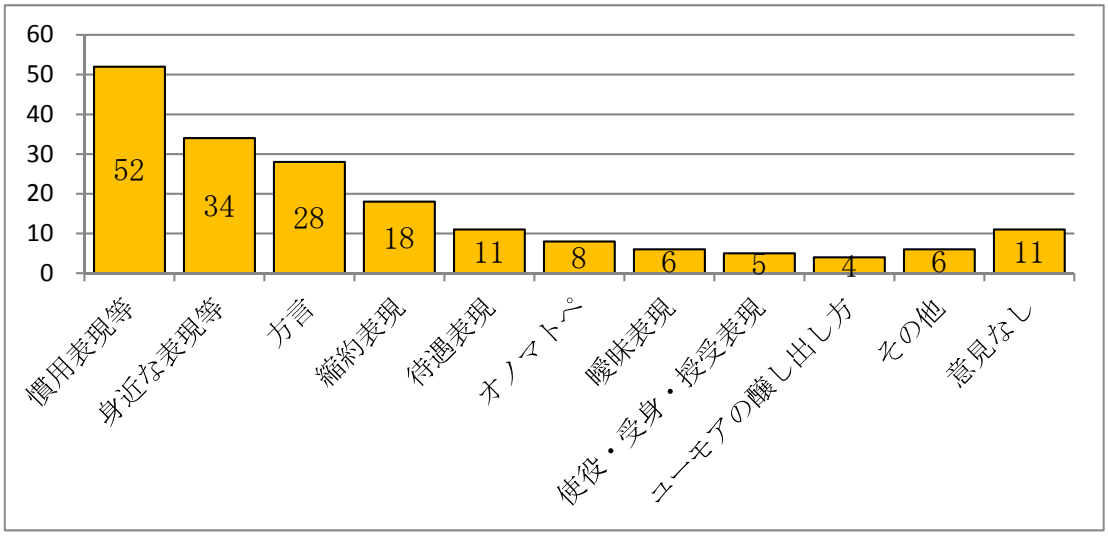

図 12 馴染まない日本語の表現

今回の自由記述に挙げられた「まじで、ガチですか、神ってる、足がつった、逆ギレ、ぶっ飛ばす、ワンチャン、何だと、ハンパない[10]、やばい、でっかい、いまいち、ぶっちゃけ、めちゃ～、～さ、

[10] ハンパない：半端ではない

～頂戴」等の表現は教科書の中にどれほど生かされているのだろうか。それらはクラスで補充的な情報として導入できると言うなら、導入の時機と方法についても色々工夫する必要がある。現行の教科書において語彙量は決して少なくはない。語彙の導入については量よりも質のほうが大切だと考える。若い学習者たちに自国で硬い語彙や表現をたくさん勉強させるよりも、日本の友達が来台時実際に出会えそうな場面の語彙や表現を優先して導入してもいいと考えられそうである。

6. むすび

本研究では「対日交流」を日本語学科従来の科目と同様、必須科目として定着させることが必要があることを主張し、「対日交流」のための学習項目を具体化しなければならないと考える。そこで、台湾人日本語学習者と「日本人台湾研修団」と交流した時の話題や会話の内容、感想等について話題、期待、不安、魅力、葛藤、場面、困難、表現の 8 つの面に注目して調査した。その結果は表 9 の通りにまとめられ、更に各項目に見られる上位のものを表 10 のように整理することができた。表 9 における 8 つの項目間は一見重複している部分もあるが、各項目それぞれの傾向及び特徴が見られる（5.1 節～5.8 節を参照）。

表 9　日本研修団と交流後の所感の一覧

項目	内容
1.話題：よく話題に上った事柄	美食・グルメ、台湾人の習慣、観光スポット、気候、キャンパスライフ、交通、使用言語、建物、ポップカルチャー、各地の産物、お祭り、スポーツ、課外活動、旅行プラン、台日関係、違和感、物価、地理、台湾のイメージ、その他(台湾の男子と日本の男子、台湾の年号、台湾の花、原住民文化、台北 MRT の飲食禁止、台湾の最近の出来事、台湾の歴史、「歌仔戯」、実家（自分と相手の出身地）、化粧品、宝くじのような消費後のレシート）
2.期待：日本人に知ってほしい台湾の風物・事物	台湾人の国民性、グルメ、伝統文化、生活形態、観光スポット、夜市文化、台湾と日本との因縁、台湾と中国の区別、台湾の歴史、台湾語・台湾華語、学校の特

	徴、台湾の交通、台湾の原住民文化、開発能力、台湾の気候、台湾の地理、コンビニの便利さ、特色のある産業、日本に負けていない部分、政治、伝統市場
3.不安：伝えたいことがうまく伝えられなかった事柄	日本語に相当する表現が分からない。観光用語を使用する時に不足さを感じた。料理・食べ物を説明する時に限界を感じた。特定の分野でよく用いられる用語ができない。長い発話ができない。通訳に困難がある。敬語のスイッチが苦手だ。その他（迅速に回答すること、外来語、類義表現、台湾の笑い話をすること、動詞、オノマトペ、質問、断り、討論等）
4.魅力：日本人が特に興味を持っている台湾の事物・風物	夜市・屋台、観光スポット、食べ物・飲み物、土産、バイク、台湾の歴史・風習・伝統文化、台湾の宗教関係、学校生活、市場・スーパー、デパート、言葉・使用言語、生活習慣・家庭生活、建物、美男・美女、日本と関連のある物事、野球関係、台湾人の親切さ、映画に出てきた台湾のシーン、文化差異、ソープ、マッサージ、街の看板、その他（パチンコ、ごみの処理、レジャー、伝統的なおもちゃ、 ケーブルＴＶ、お墓、美容院、床屋、台湾の若者の考え方、台湾の人口 、政治に対する熱心さ、U-bike、娯楽、バス）
5.葛藤：台湾に関する日本人の間違った印象	使用言語、国民性、衛生面、気候、発展の遅れ、食事面、中国との区別、低物価、女・男性観、交通面、台湾の地理、その他（台湾の政治。大学生はほとんど運転できる。規定が変なところは多い。台湾の産物はパイナップルケーキしかない。自動販売機では札が使えない。お箸をあまり使わない。兵役は募集制だ。日本に似ている国だ。主婦は子供の面倒をすればいい。歩くのが好きだ。売店は全部 24 時間営業になっている。日本についてあまり知らない国。美女子・美男子が多い。授業が楽だ。）、上述したものと正反対の意見（安全な国だ。交通がいい。台湾はきれいなところだ。）
6.場面：日本語で発言しなければならない場面	説明・通知、日本語通訳、発表・討論、歓迎・歓送、その他（企業見学、食事等）
7.困難：フォローが難しいと感じられた話題	映画・アニメ・芸能、日本式ユーモア、専門知識、最近の日本の出来事、日本の歴史・祭典、日本の流行語、男女関係、台湾の政治、台湾の歴史文化、相手の学校、日本の方言、日本の観光スポット、進路・就職、台湾の飲酒・煙草文化、台湾の車のブランド、動植物の名称、相手の実家、日本各地の名産物、プライバシーのこと、台湾の観光スポット、その他（日台鉄道、台湾の税金、日台企業、台湾以外の外国、簡略字と繁体字の区別、台湾の食べ物のまずさ、台湾の賃金、化粧品、アルバイト、台湾の料理、日本の食べ物、台湾に関する物事全般、日本人が無口な場合、相手が話すスピードが速い場合等）

8.表現:日本人が頻用する表現であるが自分には使用できなかった日本語	慣用表現、身近な表現、方言、縮約表現、待遇表現、オノマトペ、曖昧表現、使役・受身・授受表現、ユーモアの醸し出し方、その他（発表時の表現、助詞、テンスの使用、形容詞の使用）

表 10　8 つの項目に見られる上位三位の一覧

項目	1 位	2 位	3 位
1. 話題	美食・グルメ	台湾人の習慣	観光スポット
2. 期待	台湾人の国民性	グルメ	伝統文化
3. 不安	日本語に相当する表現が分からない。	観光用語を使用する時に不足さを感じた。	料理・食べ物を説明する時に限界を感じた。
4. 魅力	夜市・屋台	観光スポット	食べ物・飲み物・土産
5. 葛藤	使用言語 国民性	衛生面	気候 発展の遅れ
6. 場面	説明・通知	日本語通訳	発表・討論
7. 困難	映画・アニメ・芸能	日本式ユーモア レジャー･スポーツ	最近の日本の出来事
8. 表現	慣用表現等	身近な表現等	方言

今後「対日交流」という授業科目の計画と運営をする際、表 9 の記述を参考にすれば、現実味のあるシラバスがデザインできるはずである。また、表 10 のようなランキング表は優先して指導したい時の貴重な情報となる。以下の表 11 には第 4 節の図 4 で言及した理想的な外国語教育の関係図に沿って、枠組レベルと談話レベルに分けて対日交流の指導上の提言をまとめる。

表 11　対日交流の指導上の注意事項

枠組	語彙	語彙と文法の導入方法は学習者が置かれた環境によって区別を付ける必要がある。また、語彙の導入については量よりも質のほうが大切である。若い学習者たちに自国で硬

レベル	文法	い語彙や表現をたくさん勉強させるよりも、日本の友達が来台時実際に出会えそうな場面の語彙や表現を優先して導入してもいい。
	発話構成	1.台湾ならではの食べ物、飲み物、産物を日本語で紹介できるように指導する。 2.教育現場では練習、試験、特訓のみに止まらず、学習者自身に口頭伝達の改善点を気付かせるべきである。
談話レベル	問題処理	相手の意見を尊重しながら、論理的な反論により自分の考え方を伝える訓練があってほしい。
	社会言語	1.自文化と日本文化を比較する感性、方法を気付かせる。 2.学習者の環境における身近な人、事、物について関心を持つ習慣や方法を指導し、それを日本語で紹介する機会を与える。また、自分の国の歴史、政治、経済、教育制度、現勢についてあらためて再勉強させる。 3.日本語を通して相手に台湾にもっと興味をもってもらうことも対日交流の姿勢の一つだと考えられる。
	円滑的コミュニケーション	1.交流時の話題、表現、場面のシミュレーションを行う。 2.日本の漫才、大喜利、バラエティー番組等のお笑い芸能の内容を利用すれば、学習者のユーモアの発話の訓練に役立つはずである。 3.交流にあたって、事前の準備と、交流中の記録、事後の感想・反省を学習者たちに進めてもらう。

今回の分析の結果には協力者たち（台湾人日本学習者）の枠組レベルの問題が少なからず見られる。しかし、その問題に対処してから談話レベルの学習を始めるのではなく、初級の段階から、談話レベルの問題に注意を向けさせ、目標は「交流能力」であることを意識させつつ学習を進めることが、枠組レベルの知識がなぜ重要であるかに気付かせ、学習者を動機付けることになると考えられる。

本稿の分析の結果は、「交流能力」に焦点化した科目のシラバス設

計の基礎となるだけでなく、JLPT や BJT(ビジネス日本語能力テスト)等の従来のテスト以外の、対日交流能力を評価する試験の開発にも貢献できると期待される。なお、本稿では対日交流能力の育成について基礎研究に止まっているが、今後それに関する授業の運営方法の研究に向けて取り組んでいきたい。

参考文献

石井敏・岡部朗一・久米昭元（1995)『異文化コミュニケーション―新・国際人への条件』　有斐閣　（初版：1987）

桂田愛(2015)「グローバル人材育成とハイブリッド留学制度に関する一考察－静宜大学日本語学科を例に－」『2015 年度「日本學與台灣學」國際學術研討會』 静宜大學日本語文學系

工藤節子(2017)「交流活動における学習環境デザインの要件―あるプロジェクト型交流を事例として―」『2017 年第 11 回 OPI 国際シンポジウム(台湾大会)予稿集』淡江大学日本語学科 pp.56-63.

黄英哲（2013)「中級レベルの日本語専攻台湾人学習者に対する口頭運用技能指導への示唆－意識調査と発話分析の結果から－」『台湾日語教育學報』第 21 号 台湾日語教育學會　pp.106-135.

黄英哲(2017)「日本語学習者の「対日交流能力」の養成について」『第 18 回東アジア日本語・日本文化フォーラム予稿集』九州大学大学院言語文化研究院 pp.9-12.

張瑜珊(2017)「プロジェクト型交流における言語行動の一考察」『2017 年第 11 回 OPI 国際シンポジウム(台湾大会)予稿集』淡江大学日本語学科 pp.64-71.

文野峯子・工藤節子（2012）「体験型授業を通じた学生の学び―日台プロジェクト交流を例に―」『イマ×ココ』創刊準備号　ココ出版　pp.59-72.

真嶋潤子（2006）「日本語教育から見た異文化理解」『異文化コミュニケーションを学ぶ人のために』細谷昌志編　世界思想社

pp.85-103.
村上公一(2012)「中国語短期研修は学生に何をもたらすか―学習日記」の分析から― 『早稲田大学教育・総合科学学術院 学術研究（人文科学・社会科学編）』 No.60 pp.373-381.
日本交流協会（2010）『2009年度台湾における日本語教育事情調査ー台湾日本語教育現況調査』 財団法人交流協会
賴錦雀(2012)「異文化交流能力育成を目指した日本語教育観」『台湾日本語教育学報』第9号 台湾日本語教育学会 pp.3-23.
賴錦雀(2017)「日本語学習者に求められる異文化交流能力の育成と測定―台湾人の場合―」『2017 年第 11 回 OPI 国際シンポジウム(台湾大会)予稿集』淡江大学日本語学科 pp.190-197.
林長河（2014)「龍山寺を例にした自国文化を説明する日本語教育の模索―語学教育理論の応用と課題―」『台湾日本語文学報』第35号 台湾日本語文学会 pp.354-374.